「海幸山幸伝説」教材化について(2)

―中学校使用テキストの提供―

永吉寛行[1]・清清香[2]・前田絵理[3]・杉尾奈緒子[4]

要旨

小学校学習指導要領国語科における「神話」に関する指導事項や改訂教科書を検討の結果、宮崎県独自の神話教材として海幸山幸伝説が相応しいとの結論を得るとともに、学校現場の実態に合わせて教材範囲や「ヤマ場」箇所の設定までの研究成果を踏まえて、それを中学校第３学年用の教材としても使用できる可能性があることから、実際の教材化を試みた。

１．本稿の目的

永吉は、日向神話の教材化についてその条件整理の考察を行い、それを踏まえて本年報に掲載されている小学校使用テキストを提案した[1)]。そこでは次の通りの条件を設定している。

①題材は海幸山幸伝説が相応しい。　②適当な分量（約 1,500 字）
③小学校２年生相当の言葉遣いや用字　④独特の語り口調や言い回し
⑤起承転結や中心人物の成長などを取り入れた「ストーリー性」「完結性」
⑥学習活動の設定
⑦神名は「ウミサチ」「ヤマサチ」あるいは「海さち」「山さち」
⑧ストーリーは山幸彦が人間界に帰還するあたりまで

以上は、あくまでも小学校第２学年の児童が、読み聞かせ等の活動を通して古典への親しみを持つことに目標を設定したうえでの条件である。

現在の小学校・中学校・高等学校が使用する国語科の検定教科書における、『古事記』等を題材にした教材の採録状況を調べると、小学校第２学年で『古事記』に取材した「いなばの白うさぎ」等が扱われ、その後かなりの間をおいて、高等学校における選択科目「古典探究」の教科書において『古事記』におけるヤマトタケルノミコト伝説が扱われるのみである[2)]。

そこで、その伝統的な言語文化の継続性、宮崎県内の中学校生徒に向けての郷土教材開発の必要性等に鑑みて、中学校用の「海幸山幸伝説」テキスト開発をすることにした。中学校学習指導要領・国語〔知識及び技能〕(3)アには「歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」が指導事項として挙げられている。宮崎県はイザナキ・イザナミを初めとして、アマテラスオオミカミやコノハナサクヤヒメなど、歴史上伝説の地といわれるスポットが数多くある。歴史というワードを中心にした国語科学習や郷土学習（総合的な学習

[1] 宮崎大学教育学研究科
[2] 宮崎大学教育学研究科教職実践開発専攻教科領域指導力高度化ｺｰｽ
[3] 宮崎大学教育学研究科教職実践開発専攻教科領域指導力高度化ｺｰｽ
[4] 宮崎大学教育学部（国語教育講座）派遣研究生

の時間等）の教科横断的な学習の礎にもなり得るという判断のもと、中学校３年生用のテキストも開発することにした。

なお、本稿の作成に当たっては、上記永吉の整理した条件に基づき、宮崎大学教育学研究科教科領域指導力高度化コース科目である「言語教育系内容開発研究ⅡＡ」受講者２名及び教育学部派遣研究生１名が担当した。主に全体整理を永吉、テキスト作成を清・前田・杉尾が担当したが、本稿の完成までにはほかに国語専修の大学院生２名を加えた合計６名全員で随時検討を行って成稿としたものであることを付け加えておく。

２. 中学校用テキスト「海幸山幸－『古事記』」から」

中学校用テキストについては、他の古典教材の採録紙面（教材化）の状況認識を持つところから始めている。その調査に使用した教科書は令和５年度の宮崎県内公立中学校における国語科教科書の採択状況に鑑みて、光村図書及び東京書籍版の教科書とした。

その調査の結果から導き出した教材化の条件は次の通りである。

①教材ページ冒頭に作品の説明を付す。

②原則として原典本文を掲載し、適宜歴史的仮名遣いでルビを振る。

③全文に標準的な現代語訳を付す。ただし、あくまでも原文の音読活動を重視したいとの考えから、現代語訳のフォントについて、原文よりも小さくして、原文が強調されるように配慮する。

④他の古文教材に倣い、脚注を適宜付す。

⑤教材範囲については小学校用テキストと同範囲とするが、原文で掲載すると全文がかなりの長大な分量になることと、宮崎県内には山幸彦（火遠理命）の子とされる鵜草葺不合尊（「古事記」上は日子波瀲武鸕鷀草葺不合尊）の言い伝えの残る場所があることなどから、生徒にとって物語的な興味が湧きそうな箇所のみを原文・現代語訳・脚注をテキスト化し、その他の部分は現代語による説明（いわゆる「リード文」）でテキスト化した箇所を繋いでいき、鵜草葺不合尊についてもリード文ではあるが人名として出るようにした。

⑥テキストの後ろには、検定教科書の体裁に基づいて、学習目標を「学習活動」「目標」という２つの視点から提示している。

⑦小学校と同じように単元指導計画案を示した。教科書掲載の他の古文教材と同じように３時間配当を想定して作成してある。

なお、本テキスト作成に当たっては、

・財団法人北郷町温泉観光協会制作「神々の系図」

・みやざき文化振興課“神話のふるさと みやざき”神々の物語

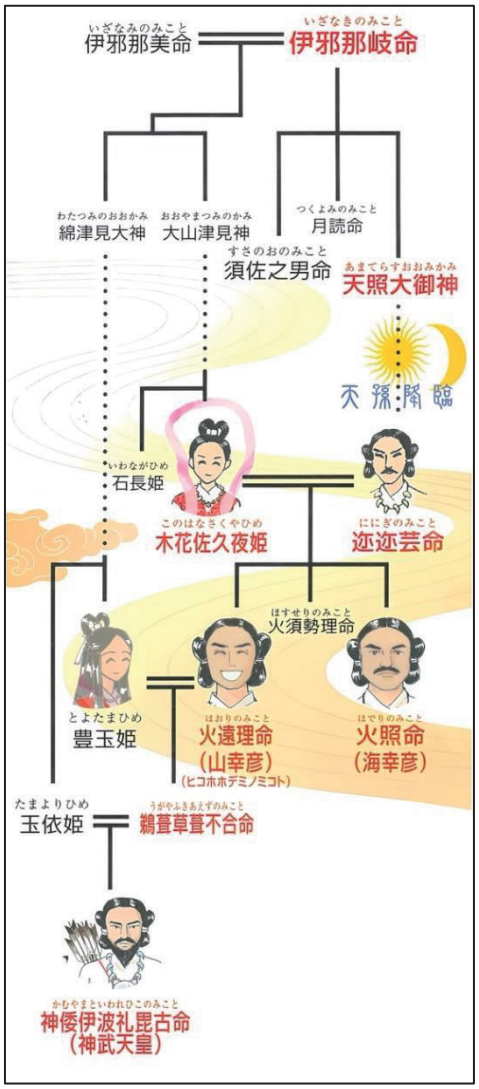
・宮崎市観光協会“宮崎市観光サイト”宮崎の神話と伝説～街角のあちこちが古代へのタイムトンネル～

・宮崎県教育研修センター“みやざき ひむか学ネット”宮崎県の神話・伝承マップ

を参考にさせていただいた。参照 URL についてはテキスト末尾に明記してある。深く感謝申し上げる。

海幸山幸ー「古事記」から

出典：「古事記」（こじき）　奈良時代の歴史書。天皇の命で稗田阿礼（ひえだのあれ）が暗唱した天皇の系譜や神話・伝説などを太安万侶（おおのやすまろ）が撰録（せんろく）したもの。三巻から成り、上巻は神代の事柄、中・下巻は人代の事柄を記す。天皇を中心とする中央集権国家の確立にあたって、理論的・精神的な支柱とすることを目的としたもの。歌謡や、歌物語風の説話、伝承、神話などを多く含み、文学性にも富む。



「神々の系図」財団法人北郷町温泉観光協会制作

瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）と木花開耶姫（このはなさくやひめ）の間には※三柱の子が生まれた。長男の火照命（ほでりのみこと）は、海の獲物をとり、「海幸彦（うみさちひこ）」として暮らしていた。三男の火遠理命（ほおりのみこと）は、山の獲物をとり、「山幸彦（やまさちひこ）」として暮らしていた。

※柱…神仏を数える場合、助数詞は「人」ではなく「柱」を用いる

ここに、火遠理命（ほをりのみこと）、其の兄火照命（そいろせほでりのみこと）に、「各（おのもおのも）※さち（あひか）を相易へて用ゐむ」といひて、

ある日、火遠理命（ほおりのみこと）が兄の火照命（ほでりのみこと）に対し、「それぞれ道具を取り替えて使ってみたい」と言って、

※さち…道具または獲物

三度乞ひたまへども許さざりき。しかれどもつひにわづかに相易ふることを得たまひき。ここに火遠理命、海さちを以ちて魚釣らすに、かつて一つの魚も得ず、亦其の鉤を海に失ひたまひき。ここに、其の兄火照命、其の鉤どもを乞ひて曰はく、「山さちも己がさちさち、海さちも己がさちさち。今は各さち返さむと思ふ」といひしとき、其の弟火遠理命、答へて※曰りたまはく、「汝の鉤は、魚釣りしに一つの魚も得ずて、ついに海に失ひつ」と曰りたまひき。

三度も願い求めたが、(火照命は)許さなかった。しかしながら、最後にやっと取り替えることができた。そこで、火遠理命は、海の獲物を取る道具を使って魚を釣ってみたが、全く一匹の魚も釣れなかっただけでなく、兄の釣り針を海中になくしてしまった。そこへ、兄の火照命がその釣針を返すようにと求め、「山の獲物も、海の獲物も、やはり自分の道具でなくてはうまく得られない。今はもうそれぞれ道具を返そうと思う」と言ったところ、弟の火遠理命は答えて、「兄さんの釣り針は、魚を釣った時に一匹の魚も釣れずに、とうとう海中になくしてしまいました」と言った。

※曰る…言う、述べる、告げる

しかれども 其の 兄(いろせ) 強ひて※乞(はた)ひ徴りき。 故(かれ)、其の 弟 御佩(いろどみはかし)の※十拳剣(とつかつるぎ)を破りて、五百鉤(いほはり)を作りて、償(つくの)ひたまへども取らず。亦一千鉤(いちはり)を作りて償(つくの)ひたまへども受けずて、「なほ其の正本(もと)の鉤を得む」といひき。

しかし兄は強引に返せと責めた。それで、弟は腰につけていた十拳の剣を折り、五百もの釣り針を作って弁償したが、（兄は）それを受け取らなかった。（弟は）またさらに千の釣り針を作って弁償したが、兄は受け取らず、「やはり正真正銘のもとの釣り針を返してもらおう」と言った。

※乞ひ懲る…無理に「よこせ」と請求する

※十剣剣…諸刃の長剣

こうして、火遠理命が海辺で泣き悲しんでいると、海の潮を支配する塩椎神(しおつちのかみ)に綿津見神(わたつみのかみ)（海の神）の宮殿に行くよう教えられた。火遠理命が海の宮殿に行くと、綿津見神の娘・豊玉毘売(とよたまびめ)に出会った。二人が結婚して三年経ったある日、火遠理命は釣り針のことを思い出してため息をついた。綿津見神が事情を知ると、海の魚たちを召集し、赤鯛の喉に刺さっていた釣り針を見つけた。綿津見神は火遠理命に釣り針を渡し、「この釣り針を火照命に返すとき、まじないの言葉を唱えながら後ろ手でお渡しなさい。そして、田を作るときは火照命と違う場所にお作りなさい。私が水を操って火照命の田に水をやらないようにするので、火照命は三年の間に貧しくなるでしょう。もし火照命があなたを恨んで攻め込んできたら、この塩盈珠(しおみつたま)を取り出して溺れさせておやりなさい。許しを乞うてきたらこの塩乾玉(しおふるたま)を取り出して助けておやりなさい。」と言って、塩盈珠と塩乾玉を火遠理命に授けた。火遠理命はワニに乗り、一日で地上に帰った。火遠理命はワニに褒美として小刀を授け、海に返した。

これを以ちてつぶさに海の神の教へし言の如くして、其の鉤を与へたまひき。故、それより以後は、いよよ貧しくなりて、更に荒き心を起こして攻め来。攻めむとする時、塩盈珠を出して溺らし、其れ愁へ請へば、塩乾珠を出して救ひ、かくなやまし苦しめたまふとき、稽首まをさく、「僕は今より以後、汝命の昼夜の守護人と為りて仕へ奉らむ」と※曰しき。故、今に至るまで、※其の溺れしときの種々の態、絶えず仕え奉るなり。

こうして、（火遠理命は）何もかも海の神が教えた言葉のとおりにして、その釣り針を（火照命に）与えた。それで、それ以後、（火照命は）だんだん貧しくなり、前にもまして荒々しい心を起こして攻めてきた。（火照命が）攻めようとした時には、（火遠理命は）塩盈珠を取り出して溺れさせ、そして（火照命が）嘆いて許しを求めると、塩乾珠を取り出して救った。このように困らせ苦しめたところ、（火照命は）頭を下げて哀願し、「私は、今から後は、あなた様を昼夜守護する者として、お仕えいたします。」と約束して申し上げた。それで、今に至るまで、（火照命の子孫は）その溺れたときのいろいろな仕草を舞にしてお仕え申し上げているのである。

※曰す…「言ふ」の謙譲語。

※其の溺れしときの種々の態…溺れた仕草を舞にして子孫に伝えることで、火遠理命に助けられたことを忘れないようにしたということ。この舞は九州南部の薩摩大隅地方の「隼人舞」だと考えられるが、伝承が途絶えており、舞の実態は不明。

このようなことがあったのち、豊玉毘売（とよたまびめ）が出産のため地上にやってきた。そこで火遠理命は、海辺に鵜（う）の羽で屋根を※葺（ふ）いて※産屋（うぶや）を作ることにしたが、その屋根を葺き終わらないうちにお産が始まった。豊玉毘売は「どうか覗（のぞ）かないでください」と告げて産屋に入った。火遠理命がこっそりと産屋の中を覗くと、※八尋もあるワニが身をくねらせ、のたうち回っていた。本来の姿を見られて恥ずかしく思った豊玉毘売は、産んだ御子を残し、海と地上を繋ぐ境を閉じて海に帰っていってしまった。生まれた御子は「鵜草葺不合命（うがやふきあへずのみこと）」と名付けられた。

※葺く…覆う

※産屋…昔、出産のために作られた別棟の家

※八尋…約十二～十四メートル

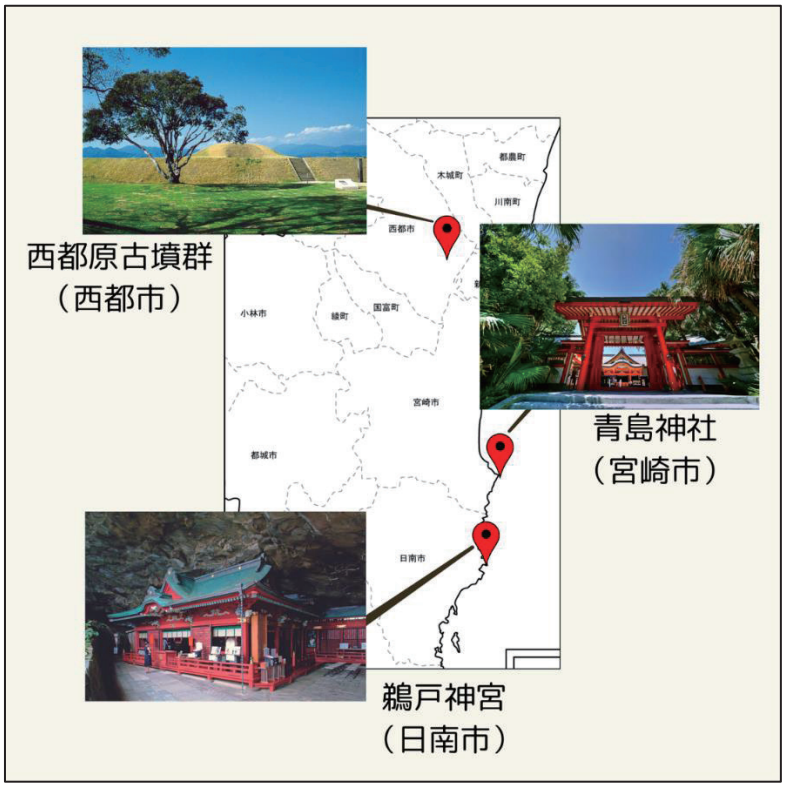
【学習】

学習目標

・学習活動　登場人物と自分の考え方の共通点や相違点を確認しながら読み、まとめたことを伝え合おう。

・目　　標　●地域に伝わる神話や伝承などとの関わりに注意して読むことを通して、古典の世界に親しむ。

●文章を批判的に読みながら、文章から読み取れるものの見方や考え方について考える。



【参考 URL】

◯みやざき文化振興課“神話のふるさと　みやざき”神々の物語
https://www.kanko-miyazaki.jp/shinwanofurusato/story.html

◯宮崎市観光協会“宮崎市観光サイト”宮崎の神話と伝説～街角のあちこちが古代へのタイムトンネル～
https://www.miyazaki-city.tourism.or.jp/feature/shinwa

◯宮崎県教育研修センター“みやざき　ひむか学ネット”宮崎県の神話・伝承マップ
https://www.miyazaki-c.ed.jp/himukagaku/unit/yume_09/map.html

【単元計画案】

第３時	第２時	第１時	
四次	三次	二次	一次
つなぐ活動④	考えを持つ活動③	読み深める活動②	捉える活動①
・文章の舞台やゆかりの地を調べてみよう。	・火照命・火遠理命と自分の考え方の共通点や相違点をまとめよう。 ・まとめたことを伝え合おう。	・文章の前半と後半で火照命の心情はどう変化したかを考えよう。	・古文の前半部分を声に出して読もう。 ・現代語訳を読んで内容を理解しよう。

1) 永吉寛行・内田千晴・明利尚美(2024)「「海幸山幸伝説」教材化について(1)―小学校使用テキストの提供―」『宮崎大学教育学研究科教職大学院年報』第４号

2) 「古典探究」は選択科目であり、必履修科目である「言語文化」の履修後に学習する可能性が高い。例えば東京書籍発行「精選古典探究（古文編）」では、全体がⅠ部、Ⅱ部に分かれており、『古事記』「倭建命」はⅡ部に収録されている。おそらく必履修科目「言語文化」を高校１年で履修したとすると、「古典探究」は高校２年以降に設定されると思われ、しかもそのなかのⅡ部ということは、『古事記』は高校３年で学習することが想定されていると言えるだろう。